

集落の成立時期と営農環境からみた付属屋の研究
—茨城県石岡市八郷地区の納屋を中心として—

Attached Farm Buildings from the Perspectives of Formation Period and Agricultural Environment:
Focusing on Barns in the Yasato Area, Ishioka City, Ibaraki Prefecture

環境デザイン領域

第1章 序論

日本の農村は、自然環境と人々の生活や生業により長い年月をかけて形成されてきた。現代では、多くの農村景観は急速に変貌しつつあるが、その成り立ちや変遷、地域性に注目し、農村に蓄積されてきた知見を理解することは重要である。また人の暮らしと環境条件とともに形成されてきた集落景観の構成要素を、過去を踏まえて理解することは、今後の集落景観の在り方や、そこでの暮らしを考えていくために必要な基礎的課題である。

本研究では、農家の生業を成立させるために不可欠な付属屋である「納屋」に着目する。納屋は集落ごとに特徴が見られ、主屋が急速に変化する中で過去の記憶が継承されていると考えられる。

本研究の目的は、茨城県石岡市八郷地区(図1)に現存する納屋の実態と建築特性を明らかにし、成立時期や営農環境の変遷といった集落の成立・発展の背景的要素を踏まえて各集落における納屋の建築特性について明らかにすることである。

第2章 研究対象地域および研究対象とする付属屋の概要

調査対象地域を茨城県石岡市八郷地区とする。(図1)

八郷地区は、古代の史料においてその存在が確認されている。生業の特徴として、明治期から住民の多くが農業に従事していた。明治期以降の主な生業として、稲作・養蚕・煙草・果樹を取り上げ、それらの特徴を確認した。

付属屋は、主屋の機能を補完する建築物であり、地域の成立過程や気候風土に適応して発達してきた生活や生業のあり方を反映している。生業に関連する付属屋の一つである納屋については、その発生が中世にまでさかのぼり、当初は小規模なものが一般的であったが、時代の変化に伴って機能が複合化し、それに応じて規模が拡大してきたことを確認した。

第3章 集落の成立時期と営農環境

本章では、八郷地区の集落の成立時期および営農環境について整理した。

その結果、調査対象地域の集落は、中世

初期から近世にかけて成立したと考えられる。また、明治期以前の営農環境については、集落の立地や耕地の性格が営農形態に大きな影響を与えていたことが示された。明治期以降については、いずれの集落においても水田の範囲はほぼ変化がない一方で、畑や桑畑、果樹園には変化が見られたことが明らかになった。

第4章 現存する納屋の建築特性

調査対象地域において468棟の納屋の現存が確認された。

本章では、現地調査から得た結果をもとに、平面規模、断面規模、下屋の出および方位、また屋敷地空間と集落空間の特徴について明らかにし、それらを集落ごとに整理した。(図2～図5)

八郷地区における一般的な納屋の規模は、梁間3間・桁行5間で2階建ての納屋と、梁間2間・桁行3間でつし2階建ての納屋であることが明らかになった。

梁間3間・桁行5間で2階建ての納屋は、戦後に建てられた比較的新しい納屋であると考えられる。梁間2間・桁行3間でつし2階建ての納屋は伝統的な納屋であると考えられる。下屋の出は、1間の西向きのものが一般的であることが明らかになった。

屋敷地内において、納屋は主屋の側面や背面の近傍には配置せず、主屋よりも庭との空間的関係性に重きを置いた配置である「分離型」が主である。

納屋の規模や配置パターンには集落ごとの違いがあることが明らかになった。

第5章 考察

集落の成立時期および営農環境と納屋の建築特性との関係から、八郷地区の典型的な納屋のタイプについて、「中世型」「近世型」「近代型」の3類型を見出すことができた。

「中世型」では、屋敷地の出入口付近に農作業と関連の強い付属屋が配置され、梁間2間の小規模な納屋が1棟置かれる傾向がある。営農環境は谷田を有する中世的耕地で、明治期以前に生産規模の拡大はみられない。また「中世型」から派生した「中世型+近代型」が確認された。中世型を基盤とし、

梁間3間の大規模な納屋が併存する型である。明治期以前は生産規模の拡大はみられないが、明治期以降に畑作規模が拡大し、大規模な納屋が必要になったと考えられる。

「近世型」は、中世型を踏襲しつつ、耕地開発の進展により大規模な納屋が必要となった型である。近世型では、屋敷出入口付近に梁間3間の大規模な納屋が1棟配置される。農業生産を前提として集落が成立・展開したと考えられる。

「近代型」は、2階建て梁間3間の大規模な納屋が屋敷地内に秩序なく配置されるようになった型である。近代になると社会情勢や農機具の変化により、納屋の構法や利用形態も変化した。営農環境は中世以降大規模な石高を維持し、稲作に適した土地であり、明治期以降は畑作と果樹栽培も行われている。(図6)

第6章 結論

本研究は、八郷地区に現存する納屋の実態と建築特性を明らかにし、集落の成立時期および営農環境の変遷との関係について考察を行った。その結果、八郷地区には規模や配置の異なる多様な納屋が現存しており、集落の成立時期および営農環境との関係から、「中世型」「近世型」「近代型」の3類型を見出すことができた。

これらのことから、納屋は集落の成立過程や営農のあり方、時代ごとの変化を反映した建築であることが確認され、結論として、八郷地区における納屋の多様性と地域性が明らかになった。



図1 研究対象集落の位置

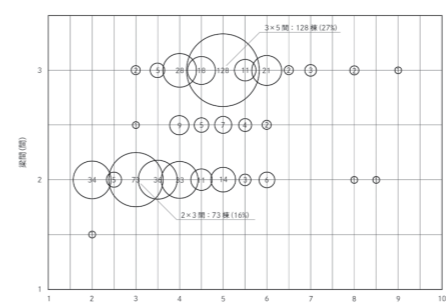


図2 平面規模

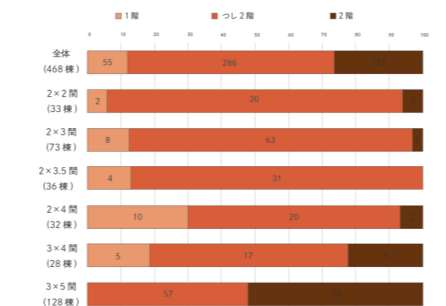


図4 平面規模別断面規模

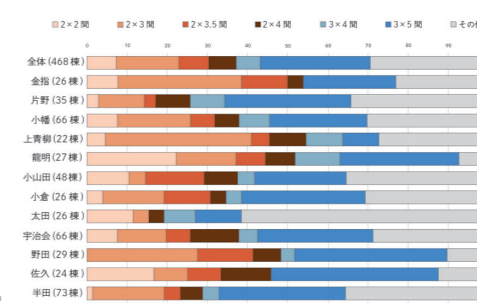


図3 集落別平面規模

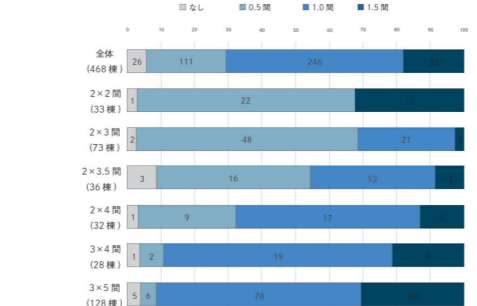


図5 平面規模別下屋の出

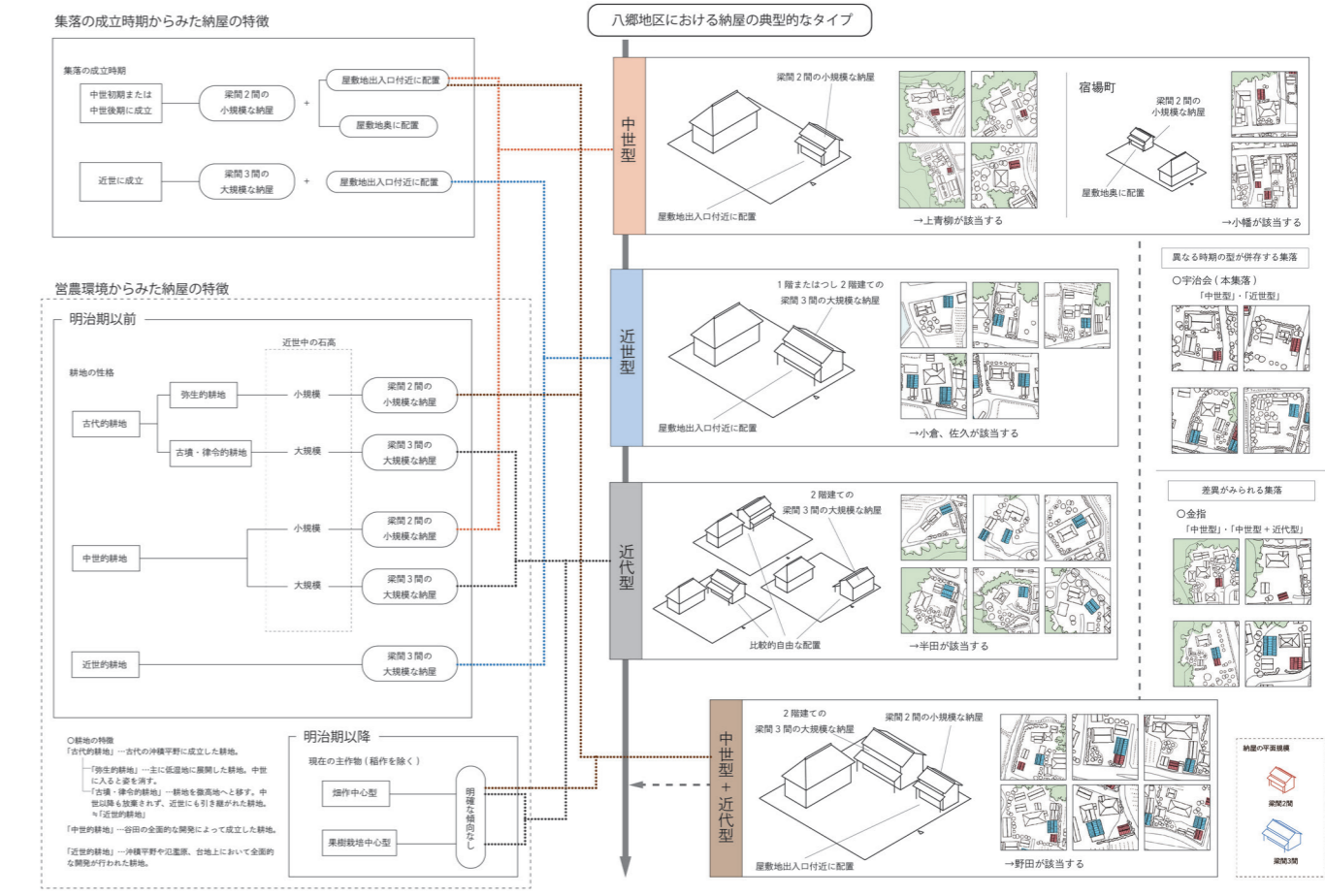


図6 八郷地区における納屋の典型的なタイプ